

## 「安心と信頼の医療と介護」 2017北海道集会を開催

連合本部(医療・福祉部門連絡会)と連合北海道(地域医療・介護問題対策委員会)は、7月1日、札幌市内で「安心と信頼の医療と介護 2017北海道集会」を開催。一般市民を含む約200名が参加した。今回の北海道集会は、毎年5月に東京で開催されている中央集会の地方版で、2015年の三重に次いで2例目の地方集会。約800万人の団塊世代が75歳以上になる2025年に向けて医療と介護の連携による地域包括ケアの確立が叫ばれる一方で、介護職場における深刻な人材不足、要介護者を抱える家族の離職問題が社会問題になっている現状について現場からの報告などを通じて理解を深め、解決の糸口を探ろうというもの。当日は、車いす体験や疑似装具を用いた片マヒ歩行体験のデモンストレーションも行われ、参加者は改めて介護の奥深さを実感していた。



↑介護の奥深さを実感した集会



↑車いすで段差やスロープ体験



←疑似装具を用いた歩行体験

### ■現場報告 「介護労働の実情と取り組み」

北海道ホームヘルプサービス協議会の七戸キヨ子会長は、担い手の20歳代～30歳代の空洞化や福祉労働の3K(きつい、きたない、きびしい)のイメージが強く残っていると、人材不足の現状を報告するとともに、来年予定されている介護報酬改定と制度改正の方向性について説明した。また、在宅介護の様子をスライドで紹介し、訪問介護の役割と目的について、「全体の生活を見ながら自立を支援し、家族介護の隙間を埋めている」、「自立できるよう促し、その人の人生を支えるのが訪問介護の理念」などと理解を求めた。さらに、「心身の状況は常に変化する、24時間365日家族や単一職種で理解して支えることは困難」として、「高齢者の尊厳を保持して自立を支援するためには、他職種の連携と本人、家族の協働が必要」と強調した。

### ■基調講演 「家族介護の現状と課題」

星槎道都大学講師、北海道男性介護者と支援者のつどい副代表の大島康雄さんは、少子高齢化による介護需要の増加、世帯構成の変化に伴い、介護者が嫁から「老々介護」「男性介護者」、「実子」、「シングル介護者」へ移行している現状、それらを背景にした家族介護への過度な期待と虐待や殺人など介護リスクが発生していると事例を示して報

告。介護休業制度や介護休暇、フレックスタイムや始業・就業時間の繰り上げといった労働時間の配慮など説明し、「介護休業の取得率は全国で3%。今の制度や社会では仕事をしながら介護はできないと言ってるに等しい」と指摘し、「家族介護が悲鳴を上げており、支援が遅れている」と介護者への支援の必要性を述べた。

#### ○事例1 介護者85歳夫 ⇒ 妻80歳要介護2 認知症

妻が介護状態となり、介護者となる。炊事や裁縫など家事が不得手で、自分の想いなども抱え込んでしまう。近所づきあいもないことから介護生活だけとなり、不安とストレスが増強している状況。熱心である一方、自分の介護方法をこなすことに注力してしまう。相手に合わせる事が難しく、殺人、心中につながる危険性がある。

#### ○事例2 介護者50歳 息子・独身 介護離職 ⇒ 母80歳要介護2 認知症

独身だったために、要介護状態の母と同居して介護者となる。介護を行うために離職をするが、独身であるため介護を一人でこなさなければならない。熱心な介護をする一方、自分のペースで介護を行うことに注力する。

#### ○事例3 介護者50歳 娘・独身 介護離職 ⇒ 母80歳要介護2 認知症

独身だったために、要介護状態の母と同居して介護者となる。介護を行うために離職をする。母からの期待が大きく、自分の想いより、相手に合わせることで負担感が強い。以前からの人間関係に影響を受ける。

## ■パネルディスカッション

「在宅介護を支えるにはどうすればよいか」をテーマにしたパネルディスカッションでは、北海道医療大学看護福祉部教授の大友芳恵さんをコーディネーターに、2025年に向けて医療や介護の方向性が「病院から在宅へ」となっている中、地域包括ケアシステムがめざす「可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らし、尊厳を持ち最期まで」ということが保障されるために、制度をどう構築していったらいいのか、訪問介護側から七戸さん、家族介護の側から大島さん、そしてケアマネジャーの側から北海道介護支援専門員協会の笠松副会長が意見を出し合った。

自宅や高齢者住宅での在宅介護を支えるにはどうしたらいいのかについて、七戸さんは「大変なところは専門職に任せようということが大切」と指摘。大島さんは日本の福祉予算は少ないとした上で、「財源の確保と手厚さを考えなければいけない」と強調。笠松さんは「介護サービスやケアマネジャーの進化が必要。寒冷という北海道の特性から、冬は施設に入り、春に自宅へ戻るということも大事」と提案した。

また、介護の人材不足には働きやすい環境整備が第一だとする一方で、介護の魅力や素晴らしさをもっと発信すべきだとの意見が出された。

本シンポジウムの詳しい内容については、講演録を作成予定。